

自分に厳しく、自分を律する

上 廣 榮 治

新年、明けましておめでとうございます。

会創立五十二年目の年頭にあたり、心より「良き年であれかし」との祈りをこめて、初春のお慶びを申し上げたく存じます。

と申しますのも、旧年がまことに大変な年であったからです。驚くべき少年犯罪、相次ぐ役所や金融機関の不祥事、倒産などなど、社会倫理、職業倫理、商業倫理の破綻による、嘆かわしく、そして極端な結末が次々と日本に突きつけられ続けた一年だったからであります。

今、年こそ改まりましたが、ここ数年にわたった大事件や大問題の根本に横たわる課題を、私たちが解決できたわけではありません。すなわち、今もなお、深刻な不安を抱えたまま、新春を迎えるにいたったのであります。「良き年であれ」とは決まり文句として申し上げたのではないのです。

年頭のご挨拶といたしましては、やや異例かとは思いますが、ここ数年の事件の根幹にある問題につ

いて、私の日頃思うところを述べつつ、今年一年をどのような心構えで実践に当たるべきであるのかを、皆様とともに考えてみたいと思います。

政治、経済、社会、教育、宗教など、あらゆる分野で起こっている問題の、すべてに共通する病根がある、私はそう感じております。すなわち、誰もが「自分に甘い」という一事であります。昨年一年に話題となった問題の一端を思い出し出してみてください。どの問題であれ、当事者が自分を甘やかさず、厳しく自己を律することができていたとすれば、起こりようもなかった問題ばかりであります。

例えば汚職です。自分の立場、自分の職責のなんたるかを知っていながら、「これくらいなら、まあいいか」「これくらいならわかりはしまし」と我が身を甘やかしつつ深みにはまり、やがて、罪の意識も薄れ、あるいは自らの罪を覆い隠すため、次々とより大きな罪を犯し続けることになったのでしょうか。総会屋との癒着なども、同じく自らに甘い体質から生じた事態です。彼らは、世間に知られては困る会社や経営の事情を隠すために、大金を支払い続けていたのです。自らを厳しく律し、取るべき責任をとろうと覚悟さえすれば、何も恐れることはなかったはずですが、ところが、自分を甘やかし、自分を守るために、困った事情をその場しのぎでごまかそうとしたがために、痛い腹を探られたのです。

大手証券会社や銀行の破産も、断固として厳格な経営に切り換えることができなかった「甘い」の結果だといってよいでしょう。経営者は、自分の任期中はそつとしておこう、なんとかなるだろうと考え、社員は会社がなんとかするのだらうと思う。誰もが自分がなすべき決断から目をそらし、自分に甘い安易な道を選んできたのです。

教団の意思が何物にも優先すると信ずる恐るべき狂信者たち。あるいは、自分のしたいことは何をしてもいいと思いい込んでいた少年たち。彼らは事を起こすさい、それがしてよいことか否かを、多分、考

えもしなかったと思います。甘やかされ、自らを律することのなかった彼らは、結果として、自分に対してすべてを許してしまったのです。

我が会では「氣づき即行」と申します。悪いと思つたら直ちに改める。よいと思つたら断固としてこれを行なう。それほど難しいことはありません。ではなぜ、さまざま不祥事の当事者たちに「氣づき即行」ができなかつたのでしょうか。

答ははつきりしていません。彼らには、時に当たつて照らすべき規範きはんが、すなわち倫理観がなかつたからです。人としていかに生きるべきかという基準がないがために、自分にとつて得であるかどうか、自分のさもしい欲望に適なうかどうかという、低い次元でしか行動を決定できなかつたのです。

そうです。私たちが幸福に、社会の指弾しだんを受けることなく生きていくうえで、倫理とはまことに大切なものなのです。私たちが日々の行動を決定するとき、倫理という規範は不可欠なのです。

そもそも倫理とは、人の人たるの道であります。また、倫理観とは、人が生まれながらに持っているものであります。つまり、人が人らしく生きるためには、誰しも、常に自分の内なる倫理観に照らして、厳しく我が身を律してゆかねばならないのです。それは人間の宿命だといつてもよいかもしれません。

著名な中国文学者、吉川幸次郎先生は、『論語』の中でも、最もすぐれた条くだりの一つとして、曾子そうしの言葉ことばをあげておられます。

——曾子曰いわく、士しは以もつて弘毅こうきならざる可べからず。任重くして道遠し。仁じん以もつて己おのれが任なと為なす。亦また重おもからず乎や。死しして而しかうして後のち已やむ。亦また遠とほからず乎や——人は「弘」（寛容）と「毅」（断固たる強い意志）を持たなければならぬ。なぜなら、人はそれぞれ任務を負っており、その人生は長いからだ。では、私の任務とは何か。私は「仁」、すなわち倫理の実践であると定めている。これこそ最も重い任務では

ないか。しかもそれは命ある限り続くものだ。その道はなんと遠く遙かではないか。

そうです。人間は人間である限り、人の人たるの道、倫理から離れることはできないのです。誰もが、我が身を倫理に照らして、厳しく律してゆくという使命を負っているのです。

この使命を果たすためには、他を許しつつ自分には厳しいという態度、「寛容」と「強い意志」を必要とするのです。我が会という「人の悪を言わず、己の善を語らない」という信条、これこそが「弘」と「毅」そのものです。実践倫理では、あくまでも人には寛容に、己には厳しくと説くのです。

これを、さまざまな不祥事に共通する「自分に甘い」という病根と比べてみてください。両者は、生き方における両極端ではありませんか。そして、私たち人間は、「人たるの道」を選ぶしかありません。私たちは、日々時々刻々、己のほしいままな欲望と対峙せねばなりません。易きにつく怠惰な心と対決せねばなりません。もしあなたが「己を律する」ことを、辛いことだと思うようであれば、あなたは自分を甘やかし始めているのです。不祥事の当事者たちと同じ道を歩み始めているのかもしれない。社会の指弾を受け、深い後悔に苛まれるような人生を歩みたいと望む人はいないはず。しかるに、まことに多くの人々が、「自分に甘い」というかたちで、かなり危うい道に踏みこんでおります。

あなたはあなた自身を甘やかしてはいませんか。あなたの家族に甘えてはいませんか。あなたが所属する組織に甘えてはいませんか。

この新たな一年を、私はまず、自分自身に対して甘くはないかということ、日々省察することからスタートさせようと思います。自らを甘やかすという点に、すべての問題が潜んでいると考えるからです。正しい生活とは、己を厳しく律することから始まるのです。しかも、自分に厳しくあらうとすることは、誰にでも、今この瞬間からでも実践可能な倫理の大道への第一歩なのであります。